## やまちゃんの

# 地図からコラム　3

　地図からコラムの書き手”やまちゃん”です。
　ある日あるときから、あるメールマガジンに地図をつなぎ手として、コラムを担当することになりましたといいながら、小咄というかエッセイというか得体の知れないものを掲載しました。
　これは、そのときの「地図からコラム」に多少の手を入れたものです。
　ところで、自分のことは分かっているようで、分からないものですが、自身では“シャイ”で、“小心者”で、それから、うーーんと？？しだいに分かるでしょう。年齢は、今でも少年の気持ちを維持していますが、脱脂粉乳の味を記憶している”やまちゃん”です。

目　　次

1.　「地図のキイワードも、人と水と安全」
2.　「還暦の同窓会　１」
3.　「還暦の同窓会　２」
4.　「握り締めて逝くか？」
5.　「掘るまいか」
6.　「垣根の向こう」
7.　「お通夜には、子どもをつれて」
8.　「地図の太陽は西北にある」
9.　「バンダイの『なおるくん』」
10.　「手がツキ？を呼ぶ」
11.　「つながりたい」
12.　「家庭用 GIS ソフト」
13.　「領土と地図・測量」
14.　「歩ける道が無い」
15.　「帰宅難民の地図」
16.　「関寛斎のことから」
17.　「『老人力』が手に入らない」
18.　頭の中を『地図』だらけにして
19.　「地図力試験受験講座」
20.　「地図は『今』を記録する」
21.　「許せる地図表現」
22.　フジモリ氏に手をかすのは誰？
23.　記憶を地図化、地図を記憶化
24.　「太田光の私が総理大臣になったら」にのせられて
25.　再び、「領土と地図・測量」のことで
26.　地図と測量が北朝鮮を開放する日
27.　少しだけ痛みの分かる自分がうれしい
28.　こんな記事が単に嬉しい
29.　店主は、こんなことが恥ずかしい」
30.　五度ずれている日本地図を！

31. 今のうちに　忘れぬうちに　故郷の村の地図を書いて置かんと思い立ちたる
32. 地図測量者が見たレオナルド・ダ・ヴインチ展
33. 父母が咲かせた花

**「地図のキイワードも、人と水と安全」**

かなり前から言われていることなのだが、いまもなお、多くの（商品開発や今後の）ことを考えるキイワードとして大切なのは、「人と水と安全」であると“やまちゃん”は思っている。

それは、日本という国では、いろいろの意味で、人・水・安全が世界水準でなかったということである。時代の流れは、島国であるこの国にも、国際化の高波が襲った。そして、これらのことが国際水準に近づくことになった。そこでは、あるものは高められ、あるものは低下する。

永い間、この国では、水と安全が無償で手に入るといわれてきた。

その水への価値観と、安全への配慮不足にも変化が起きた。災害や安全ということでは、水との関連が注目される。飲料不の安全性、洪水・がけ崩れなど水に係わることが多い。

安全ということでは、地図やナビゲーションにおいても然りである。単に誘導するということよりは、より安全に誘導する、より安全な運転を援助する（ITS など）といった方向へ進展している。

また、車ナビから人ナビへの発展という傾向がある。ここでも単にナビゲーションするというよりは、安全に支援するという観点が重視されている。高齢者・体の不自由な方、そして幼少者などの弱者に重きを置く傾向にある。地図そしてGPSなどとかかわりの深いGISについても、注目すべきは安全や災害である。

私たちは、緊急避難路や避難場所についてど

れだけの知識があるだろうか。提供する地図などが、この情報の不足をどれだけ補うように配慮されているだろうか。緊急時にも支障なく稼動するシステムだろうか。そうした配慮が求められる。

一方では、地図を（多様に）楽しむということがあることは、個人が尊重された社会との関連で当然のことである。忘れてはならない。（2005.2）

**「還暦の同窓会　１」**

ある日、北の故郷から還暦同窓会の案内が送られてきた。

“やまちゃん”の母校は、住んでいた谷あいの炭鉱町から汽車を乗り換え 1 時間強もかかるところ、水田が広がる、その町のはずれに工業高校はあった。

高校生活は、惨憺たるものであった。といっても、それは“やまちゃん”自身のことでも、多くの学友達のことではない。学校にとってということ。

悪事の限りを尽くした生徒のお陰で、手におえない学級担任は、1 年も持たずに交代した。その後、新しい学級担任がやってきて、残りの任期は何とかつじつまを合わせたようだが、教室には謹慎や停学処分のものが常にいて、先生達にとっては苦労の連続であったに違いない。少数のまじめに勉学を目指したいものにとっても落胆の日々であったに違いない。

また、「工業高校はあった」と過去形になるのは、その高校の土木科が、実業高校離れや過疎化などと相まって、かなり前に廃科となったからである。

“やまちゃん”は、その学校を卒業した後の数年は札幌勤務であったが、概ね本州各地の勤務であったから、40 年間の間に同窓会へ出席したのは、卒業してまもなくのころと１０数年前に再び札幌勤務となったときのたった二回だけ。その間、まめに年賀状をくれる者もいたが、学校時代のことを書き留めてくることもなく、忘れかけたころ送られてくる同窓会報とい

ったものが、唯一母校の近況を知る手段であった。それも、土木科の廃止ということで、音信も極端に薄れている。

今回も、これまでと同じように遠路であったが、便りを受け取ると躊躇せずに出席の葉書を投函した。区切りの年ということもあり、先生も、多くの学友の出席も予想されたからだ。

ともかく、“やまちゃん”、開催地函館の地図を握っていそいそと出かけた。(2005.3)

「還暦の同窓会　２」

飛行機の時間との関係で、約束の刻よりは2時間も早く到着した“やまちゃん”は、五稜郭を訪ねた。もちろんライフワークの地図測量史跡のことを考えてのことである。

城内にある、函館市立博物館五稜郭分室では、注目の土方歳三が係わった函館戦争について紹介していたのだが、北方地図とも係わりがあるらしいと聞いていたからである。

ともかく、幹事の誰よりも早く着いた“やまちゃん”、早々に外出した。晩秋に近く、風が冷たい五稜郭公園には、大勢の観光客が詰め掛けていた。会話からするとその大半が中国系（台湾人）のようである。台湾や韓国の観光客が増えていることはテレビなどで紹介されていたことだが、実際に目にするとなにやら不思議な気がする。

日本人でも知識の低い五稜郭や函館戦争を台湾人にどのように紹介するのか、気になるところだが。

観光客や博物館でのことは、他所に譲ることにして、受付を済ますと早々に温泉へ。津軽海峡とその右手に函館山が夕日に映えて美しい。窓からの景色を眺めながら体を埋めていると、幾人かのおやじが入ってきた。どの姿を見ても級友でありそうでもあり、そうでないようにも見える。「あの禿がなー」「あの腰の曲がった痩せ男がなー」と、級友の若かりし時と比較して、面影を見ながらも声をかけることに躊躇しながらただ見入ってしまった。

後で聞いた所では、声をかけられなかったの

は互いのことだったようである。

　そして、当時かなりのおじさんと思われた担任は、それほどのことも無く、高々10 数歳の違いであったのには驚く。当時、先公はすべて「おやじ」か、「じじい」などで括られていたが、それは人生のお仕舞が近くなってやっと知った。

　それはともかく、学生時の冷や汗ものの悪事の暴露もなく、にこやかに酒を酌み交わした。

　そして、「あーあ、同時代だ」と、級友の誰もが納得する「高校三年生」を唄って無事お開きに。

　還暦の同窓会は、他人の禿具合と腰の曲がりを確認して、安心するためのものであった。

（2005.3）

**「握り締めて逝くか？」**

“やまちゃん”の地図好きは、幼少のころからのものであることは、読者の大半はご存知である。

肌身離さずとはいわないが、常に何がしかの地図に囲まれて過ごしてきた。世界地図から知らない町を想像し、空想の地図をノートの端に書いた子どものころ。地形図を作るための測量のために野山を駆け巡ったころ、地図・測量行政の一端を担っていたころ、そして、小さな文章を書く今、常に地図とともにあった。

そんなこのごろ、明治期の新聞から「西郷の籠った洞窟に世界地図」という記事を見つけた。

あの西郷隆盛が西南戦争末期に立てこもった洞窟には、物らしきは、何一つ残されていなかったが、欧米諸国が見える世界地図が一部残されていたという(M10.10.15、東京日々新聞)。

圧倒的な官軍と戦うさなか、西郷はこの地図を肌身離さず持ち歩き、暇があればこれを開き、頷いていたという。

何をどう考え、納得していたのか、今となっては知る由も無いが、日本の、それも九州南部という局地戦のさなかにあっても、世界を読んでいたことだけは明らかである。

西郷はこれを残して、別府晋介の介錯によって自刃した。そこは、自ら開いた私学校にほど近い、城山・岩崎谷での最期だったという。

西郷は、大きな意味での地図の読める人であったという証である。

大いなる地図好きの“やまちゃん”としては、この話に深い感慨を覚える。と同時に、我こそ

は、「（地図を）握り締めて逝く」ことを願うのである。

　そして、銅像とは云わないが、浴衣姿の写真が仏前に飾られることも願ってもみるのだが、おりしも浴衣ブームの中でも、地図模様のそれを見つけていない。(2005.5)

**「掘るまいか」**

新聞記事から、思い立って映画を観た。

映画好きの人には、話題にもならないことだが、数年に一度程度しか劇場に足を運ばない“やまちゃん”にとって、これは事件に近い。

目の前のスクリーンに映されたのは、知っている人は知っている、有名な表題のものである。

映画は、手掘りトンネルとしては、日本一長い山中隧道をテーマにしたもの。そのことよりも、あの中越地震で村を追われた山古志村の人々が、雪に埋もれる日常から命を守るため、自らの手で掘ったトンネルのこととして有名になった。

トンネル工事の開始には、貧しい村人自らの資金と労働力で実行することへの反対意見もあったが、粘り強い協議を重ね、昭和 7 年に着手され、途中戦争による中断はあったとしても足かけ 18 年を必要とし、昭和 24 年 5 月に完成した。

「トンネルを掘ろう」というきっかけを作ったのは、薬の受け取り雪深い峠を越えるわが子の無事を祈る、病弱な母の気持ちであったという。

そして、もうひとつ忘れてならないのは、彼らの志に打たれて協力を買って出た一人の測量士の行動があった。彼の行った、事前調査結果があってこそ、掘削を始めることができた。

この小さくて、大きなトンネル工事。なぜ公共事業として即座に施工されなかったのだろうか。雪深い村の人の命を守るための道と産業をさらに興すための道とのウエートはどのよ

うに考えられたのだろうか。

事業と利害、負担と生活維持などのことで、繰り広げられた住民の葛藤と協議。いずれのことも簡単に答えの出ない問題ではあるが、粘り強い対話や交渉とともに工事は進行した。最後半には、補助金が投入され建設業者への外注も行われることになった。

書きつくせない、幾多の困難を乗り越えてトンネルは貫通し、完成する。

今、長野県のある小さな村では、村の活性化、将来のために少子化を防ごうと、日本のどの市町村よりも手厚い政策を進めているという。そこでは、従来業務の大幅な見直しで財源を確保していることは当然のことだが、そのひとつとして住民自らの手で道路補修を行っているという。

一方で、首都圏のある幹線道路では、今なお土地収用が半強制的に行われているとも聞く。

このような現状を見るにつけ、あの山中隧道こそ、公共事業の進め方の範となるべきもの、公共事業というものを考えるテキストとなるものであり、そんな道路を地図に残したいと測量士の“やまちゃん”は思っている。(2005.5)

**「垣根の向こう」**

季節外れでもあり、突然のことだが、小学校唱歌に「かきねの　かきねの　曲がり角　たき火だ　たき火だ　落ち葉焚き　あーたろうよ　あたろうよ　・・・」というのがある。

私はズーと以前から、この歌には、垣根の向こうに、何か予想もしない楽しいことが待ち受けているような、子ども心が歌われていると勝手に解釈している。

しかし、夜ともなると同じ垣根の向こうに、小さな街灯や月明かりが作る影法師や、風と樹木が作る音が、何か恐ろしいことが待っていることを予感させたこともあって、なぜ、夜と昼でこうも異なるのだろうかと、不思議に思ったものだ。

「夜、口笛を吹くと蛇が出るよ」「夜爪を切ってはいけないよ」そして、「子どもは、夜遊びしてはいけない」などと大人にいわれ、とかく「夜は悪行の刻」「最後の時」などの意味と結びつけられたことでの先入観といったものがあったからかもしれない。

明治期に日本を訪問したイサベラ・バートではないが、十分な照明が無かった時代には、「日暮れには動物のように体を寄せ合って暖を取りながら夜を迎え、曙には鶏のように起きた」。自然のままに暮らしたそのころには、予想しない楽しいこと、恐ろしいことが、そこいら中にたくさん隠れていたのだろう。

その後、私たちは新しいエネルギーと技術を手に入れ、明るい夜を過ごすようになった。その結果、私たちの生活は便利になり、次第に夜

型に変わり、幼い子どもまでが夜更かしするようになった。夜遊びは楽しいものとなっているかもしれない。

そんな今の子どもたちに、垣根の向こうはあるのだろうか。

見えない向こうの期待と不安、それはどんな時代にもあるには違いないが、現代のそれは変化しているに違いない。

恐いと思うか、楽しいものが待っていると思うかは、それまでの生活行動や思考が決めるものだろうから、垣根の先などはとっくに、対象外なのだろう（もっとも、「垣根」さえが、死語になりつつある）。旨くはいえないが、その変化が残虐な少年犯罪につながっているような気がする。

それでも、地図から風景を想像する力、風景から、そこに暮らす人々の生活を想像する力ぐらいは維持したいものだ。そして、今の子どもたちには、楽しいことばかりではなく、時には不安を持って道角を曲がって欲しいと願っている。（2005/3）

**「お通夜には、子どもをつれて」**

私の一生で、今ほど殺人事件が頻発していることは無い。

しかも、他愛ない理由で力の差を利用して弱いものを凌辱するような。死に至らしめる手段も残虐なら、その死体遺棄の方法もむごたらしいとしか言いようのない事件が多い。

お金がほしかったから、裏切られたから、注目されたかったから、理由は種々あるのだろうが、命というものと引き換えにするモノや心のなんと小さいこと。

一方で、集団自殺といったものも新聞記事を賑わす。ネットで誘われた程度の見ず知らずの者が、車内に排気ガスを引き込んで、命を絶つ。

呆れるばかりである。

そんなことを、考えていたある日、「お通夜には、子どもをつれて」という新聞記事が目に入った。

そこでは、身近なものの死を通して、死とはどのようものか、悲しみとはどのようなものかを子どものうちに実感する必要性を説いていた。“やまちゃん”も同感で、子どもたちが小さいうちに、義父の葬儀に連れて行った。もちろん、納棺の場にも立ち合わせた。

以前ある高校で、生徒がひよこから成鶏になるまで大切に育て、これを自らの手で解体して食するという授業をして、話題になったことがあった。

死とは、心臓が停止すること、思考が停止することといった知識は、誰しも持っているこ

とである。

命の尊さといったものを知るには、それだけではだめである。現場に立ち会わなければ、得られない、感情の変化とともにある知識の習得といったものを体験させることが大切である。

しかも、幼少のうちに。

生を共有し、いとおしみを持って接してきたものが、つい今しがたまで生きていたものが、死を迎えるということ。そのことを実感することで、命を大切にすることにつながる。

後者では、私たちの生が、あるものの犠牲の上に成り立っていること。それを、知ることがものを大切にすることにつながると、“やまちゃん”も思っている。

生意気な話が続いて恐縮！！（2005.5）

**「地図の太陽は西北にある」**

地図とは、「地上の様子を紙などに表現したもの」であるから、地上という立体的なものを、平面の中から何とか伝える工夫がある。

地形の凹凸は、等高線で表現しているが、それをうまく読むことは難しい。そのとき登場するのが「ぼかし」である。等高線の上などに日照に応じて濃淡をつけたもの。いまではコンピュータがこの任を全うするが、そのとき仮想の太陽位置は、北西 45 度にあるとして、陰影をつける。

日常とは、ほぼ逆である。

北西斜面は明るく、南東斜面は暗くする。こうすることで、利用者には立体感が正しく認識される。

どうしてそんな、非日常的なことをするのだろうか。

私たちは、通常この方向からの（対象物の上側）光でものを見ることが多いという体験的なことかららしいが、詳細は明らかではない。

ともかく、これを逆にすると、凹凸が逆に感じられるから不思議である。

現に、撮影時を再現した方向に空中写真を置いて見ると、誰しも正しい凹凸感が得られない。上下（南北）を逆にして、初めて正しい立体感が得られる。そのとき太陽位置は、西北方向にある。

そのようなことで、「地図の太陽は西北に位置する」ことになる。ただし、この例に沿って記号や建物にも影をつけるのだが、これには左 45 度ではなく、左（真西）に太陽があるとし

て、左側に影をつける。

「なぜ！」といわれても答えられないが、この場合に太陽が左上45度、影が右下45度では、何ともすわりが悪いからである。となると、この地図が想定する時刻は、昼時なのだろうか、夕時なのだろうか、不思議な時刻である。

そして、地図には風も吹いている。西風が吹いているのだ。煙突のけむり、火山噴気孔の水蒸気などはすべて右上45度に靡いている。ただし、温泉記号の湯気だけはあいまいな靡き方をしている。原因は、地図製作者にこのことについての一貫した思想が無いことが原因だ。

そうそう、「地図とは一定の決まりのもとで・・・」作られるもの、地図の太陽位置（時刻）、風向き、そして季節なども規定されるべきものである。

それでは、地図の季節は春夏秋冬のいつを想定しているのだろうか。答えは、このHPのどこかにある。(2005.5)

## バンダイの「なおるくん」

バンダイの「なおるくん」を知っていますか。

「なおるくん」のコピーには、「病気を治すお世話遊びで、子どもの優しい気持ちを育む」とある。

「なおるくん」には、注射器や薬が用意されていて、時折、体調が悪くなり、くしゃみや咳をするので、そのときにはこれらで、早めにお手当てしてあげると、「ありがとう」と答えるのだとか。

「お節介遊び」ということが、このヒット商品のキイワードである。そして「治す」「治してあげる」ということも。

地図にも、「治す」あるいは「直す」という行為が、利用者にできれば、これはヒット商品になれると、“やまちゃん”は思っている。

紙ベースなら、買い求めたロードマップに、自らの手で書き込む、あるいは知識として描き込むことで「治す」ことができた。

電子地図だって、カーナビ利用者の GPS の軌跡情報を収集すれば、すばやく地図更新ができるはず。と、“やまちゃん”思いついて、特許を申請しようとしたが（2001 年）、先着者はすでにいた。

それはともかく、カーナビの地図では、新設された道路について、ルート検索できるように自らの手で書き込むことは難しいが、GPS で取得した新しい道路の軌跡情報を収集して地図更新に役立て、少なくても自らのデータにだけ書き込むことは、今すぐにでもできそうである。

そうなれば、次第に古くなった電子地図の

「なおるくん」は利用者の手で治され、利用者をも育むものになると思うのだがどうだろうか。

　そのとき、電子地図は「ありがとう」と応えるだろう。そして、それを回収して、製品に活かす”竿だけやさん”も現れるだろう。（2005.6）

**「手がツキ？を呼ぶ」**

“やまちゃん”ここのところ病気もせずに元気でしたが、雨の中で転倒した。

多少ちびた靴底が遠因ではあるが、実のところは、このことだけで無く、ちょっとした段差でもつまずく自分に、最近足が衰えたなーと感じてはいた。

そんな折に、テレビからの聞きかじりで、「チョット、大股歩きでもして鍛えないといけないかなー」と思って、意識して歩いていたとき、事件は起きた。

その前に、伏線があった。

事件のあった交差点のひとつ前の横断歩道でのこと。

少々説明しておくと、この横断歩道は一方通行の道路にあって、横切る車は極端に少ない。したがって、朝夕などの通勤時には、急ぎの人がいることと、歩道に人があふれることもあって、赤信号に係わらず一方から進行してくる車の様子を見ながら横断する者が多い。

その交差点で、すぐ横にいた赤信号の中を、ボケーっとしながら横断しようとした女性が（“やまちゃん”にはそう見えた）、激走してくるバイクに轢かれそうに見えたので、“やまちゃん”彼女の肩に手をかけて、強引に引き止めた。

あー命拾いした。と思ったのは、“やまちゃん”だけだったのか、彼女はたいした礼も言わずに立ち去った。

あの子を引きとめたその手は、右手であった。

　そのことの30分ほど前のも。電車を降りようとした女性が、一見して手編み風のマフラーを落とし立ち去ろうとしたのを、拾い上げて渡した。その、好意の手も右。

　そして、小雨の降る、交差点で。
　大股歩きの足元が、路上に書かれた路上喫煙禁止のペイントの上で滑った。不意についた右手の傘の骨は、無残にも折れ、しこたま打ちつけた手には血が滲んでいる。　点々と落ちる血を見ながら、それ以前にした右手の行為と好意のことを思い出して、複雑な気持ちになった。

　今日は良い日なのだろうか、ツキの無い日なのだろうか。(2005.2)

**「つながりたい」**

ある日の昼下がり、電車の中で奇妙な光景に出会った。

ギャルが二人が、「メルアド送っといて」というなり、携帯電話キーを操作したと思ったら、それぞれの先を山型にして、近づけている。

「送った？」

「うん、送ったよ！」

とか言う会話を交わしている。

不思議なものを見た日から数日後の新聞記事によると、彼女らは携帯電話がつながりにくいときに、伸ばしたアンテナを指ではじいたり、携帯電話同士を寄せるのだという（もちろん、赤外線通信という手もあるのだが）。

うーん、車内ではアンテナマークが 3 本立たないこともあり、これを助けるため件の行動に出たらしい。

「うーん、電波ってそんなものなのか？」

もっとも彼女らは、車内では携帯電話がつながりにくいからというより、電波などという体験できにくい、見えないものを科学的に考えるより、いま身近にある携帯電話同士で伝えているという目に見える？行動に走っているともいえる。

何度思い返しても、不思議な光景だ。

本当の私の不信感は、今どき若者の非科学的なものへの抵抗感の欠如だ。

勿論、ＮＴＴドコモなどに聞くまでもなく、この行為に科学的根拠などない。

人間や科学が介在しないかのような錯覚を

もつものが、妖しさを作り出している。　　(2005.6)

　そのような考え方や使い方の中から、新しいモノづくりがはじまるの真実である。

　私たちが係わる電子地図。利用者には、鮮度を保つには地べたをくまなく調べなければならないということが、正しく理解できていないだろう。

　一方で、利用者は、作成者が思っている以上にくまなく歩きまわり、予想を超える使われ方が行われているのではないか。

　もっと、作成者の地図と利用者のそれを近づけなければならない。

　たとえば、維持管理に利用者の情報を利用する。利用者の地図に近づいて、イレギュラーと思われる使い方を知り、作成に生かすなど。

「家庭用 GIS ソフト」

インターネット書店の巨大な物流センターでは、注文を受けた本を探す作業ノルマが、1 分に 3 冊だとか。50 万点の中から記号や書名を頼りに目的の本をすばやく探すワークは、想像を絶することらしい。

そのことから思い出したことだが、「地理情報システム（GIS）とはどのようなもの」と、聞かれると「地図情報と、様々な属性情報を、コンピュータ用いて統一的に管理することで、検索や表示、解析などを簡単に行えるようにしたシステムのこと」などと答えが返ってくる。

その時対象とするのは、どのような範囲のものだろうか。地球や国土といったものに限定しなくても良いのではないかと話してきたことがある。

現に RFID（非接触タグ：Radio Frequency Identification）などの小型無線タグの出現で、倉庫内や商品棚などにおける位置情報と商品管理を適切に行うことも、GIS の範疇と考えても良いだろう。

どの棚のどの場所に、どの商品を配置することが販売に最適か、あるいは生鮮食品と室内環境との関係でこのように配置すべき、倉庫内の商品配置と取り出しにおける最適化といったことも、狭い意味のＧＩＳではないかと考えるがどうだろうか。

おっとと、少々難しくなったが、ついでだから、これを家庭に置き換えることはできないだ

ろうか。

対象を商品といったものばかりでなく、そこに居住する人とモノの関わりで考えてみる。

たとえば、家庭・オフイス・工場における詳細な地図・位置情報とそこに存在する製品・商品・機器の最適化はどうだろうか。お掃除ロボットにも詳細なそれが必要である。温度・湿度、日照などと快適な人の生活、ペットとの生活、室内植物の生育環境、あるいは、室内における段差と高齢者の環境・行動といったことでもGISの出番はあるかもしれない。

ここでの地図は、それこそ三次元のもの、さらに地上のそれ以上に短い時間経過で維持管理され表現できるものになり、位置情報取得もＩＣタグや室内無線を利用した、これまでのイメージとかなり違ったものになるだろう。

あまり適切なイメージは沸いてこないが、いつの日か、家庭用ＧＩＳソフトを販売する人が出てくるかも。

（2005.6）

**領土と地図・測量**

「日本の国境」という書を読んだ。

それによると、沖ノ鳥島を日本国土とすることで、約40万平方キロメータの排他的経済水域を手に入れているのだそうだ。これは、日本の全排他的経済水域の10%にも及ぶものである。

国際世論に対抗し、これを今後も維持するためには、同島が「島」として存在することは当然のこととして、居住するか、もしくは何らかの経済活動が確認できなければならないのだそうだ。(「島」とは、自然に形成された陸地であって、水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるもの)

標高16cm(満潮時になお海面上にある高さ)の同島には、年間2億円の維持管理費を費やしているが、それだけでは、関係国を説得できないということ。都知事訪問時の発言にもあったように(2005)、漁業活動基地やそのための海洋観測所、あるいはレジャー基地としての機能を持つなどの経済活動の証が求められている。

もちろん、領有を明らかにするための測量や地図作成といった行動も求められ、実行に移されている。地図作成はもちろん、最近のことでは、2005年6月に沖ノ鳥島に電子基準点が設置された。

国土地理院によれば、連続観測して得られたデータは、太陽光発電と衛星通信システムで３時間毎に国土地理院中央局に送信し解析され、これによって、フィリピン海プレート

の詳細な動きが監視することができるといっている。

さんご礁に設置された電子基準点から、プレートの動きが詳細に監視できるのかどうか、“やまちゃん”にはよく分らないが、領有との関連なしに行動しているとはいえないだろう。

では、竹島（韓国側の主張する島名「独島」）についてはどうなのだろうか。日本固有の領土であることを主張してはいるが、地図作成や測量といった行動はできていない。島は韓国に占拠され、その周囲の制海権・制空権も実質的に支配されているからだ。

領有という主張と地図・測量のことでは、これ以前に歴史的事実の実証のために古地図が引き合いに出される。その時示された地図には、いつ誰が作ったか、どのように記載されているか、信頼性はどうかといったことが、注視される。

少々大げさに言えば、地図・測量技術者は「領土」という意識を無しに地図を作成し、測量を成すことはできない。

それにしても、沖ノ鳥島に関しては、水没から守るための涙ぐましいばかりの維持管理と併せて経済活動の証についての良いアイデアはないようである。

さんご礁に存在する北小島、南小島合わせても二坪足らず。これでは大部分は水中ステーションで活動し、居住することにして、大して意味も無いが、地上には顔を洗うときと排泄をするときだけ顔を出す？といったことで、僅かな経済活動の証を求めるしかないと

“やまちゃん”は考える。(2005.8.16)

**歩ける道が無い**

「老人力」から始まったのだろうか、「就職力」「仕事力」「地図力」といった使い方が、増えている。「老人力」は、努力して得るというよりは、素直に老いることで備わるといったもの。

加齢することで得られる能力？といったもので、その他の「〇〇力」という使い方とは明らかに異なるものである。

現代社会のひ弱な若者たちは、あまりにも自分を殺し、努力して「〇〇力」といったものを得ようとするあまり、心の病に罹るものも多い。

しかし、人が努力して得られるものには限りがある。しかも、人が潜在的に持っているものは同量である。何かが足りなければ、何かが満ちているはずであると、“やまちゃん”は、思っている。少なくても、そう思うべきである。

かく言う私も、リタイアしたものの、加齢への抵抗が強くて、未だ「老人力」を手にしていないと自覚している。

そして、スポーツとは縁の無かった“やまちゃん”今頃になって、ウォーキングを習慣にしている。ウォーキングといえば聞こえは良いが、本当のところは通勤がなくなった分を補うだけの、老人の散歩といったところである。

ところがである、かなり前から感じていたことではあるが、自転車が走る道や人が歩く道が無いのである。

車にとっては、運転に支障ない程度の段差でも、自転車には不快である。その程度なら、我慢できるが、自動車通行には十分な車道があっても、自転車は人がすれ違うのに十分な道幅が確保されていない。自動車の性能と軟な人を隔てるものは十分ではない（公共事業費は「人」のためには使われていない）。

そこを、歩く人にとっては、いつひき殺されてもおかしくない。ウォーキングは、交通事故に遭う確立を格段に高めているのだ。

「老人力」を獲得しようとする頃になって、本当のところは、この田舎町に真に住んではいなかったということを知った。また、「老人力」を得て、ゆっくり町を見つめようとする人が増えることで、高齢者の交通事故死が格段に増えて、高齢化社会のスピードは減速するかもしれないと思い始め、ゆっくり歩ける道の地図を作りたいと思っている。

（2005.8.17）

**帰宅難民の地図**

アイデアとは、「困っていること、要求されていることに如何に対応するか、それを進めるのに障害になっているのは何かをいち早く見抜くことである。」といったものの、その発見は容易ではない。しかし、考え方としてはそのようなことである。

いかにして、目線を近づけて利用者の意見を吸収するか。発想を豊かにするかである。かくいう“やまちゃん”も、そうしたアイデアを出し、その開発に成功しているわけではない。

最近災害時の帰宅難民のための関連地図などが人気を呼んでいるのだそうだ。手前味噌ながら、このことは下記アドレスにもあるように、2004.12 にその必要性を指摘してきた。

それ以前にも、もしものときの地下鉄での脱出路について私たちは知らされていない。その情報を定期券の裏に印刷する、あるいは、小冊子などでその手のサービスをする必要であることを、どこかに書いたのだが、これは見つからない。

http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/my/tabibito/tabibito1.htm（地図の旅人「いつでもお泊りセット」）

いずれにしても、遅まきながら、“やまちゃん”希望が実現できたことが嬉しい。残念ながら以前に在籍した社にはそのようなものを取り上げる気風が無かった。本当は、このとき自分の手で成したかったのだが。

せっかくだから、その外のアイデアで実現

できていない夢を語っておこう。

「地下から地上が透けて見える地図」。これは、ディジタルなら、「地図太郎」（東京カート社グラフィック社のGISアプリ）といったものが、簡単に目的をかなえてくれそうだが、アナログではどうする。

更に一つは「超小型の駅周辺マップ」だ。これは三浦折よりも簡便な折りたたみで、駅から歩ける範囲の地図を提供するもの。これに地下街を含めれば万全なのだが。

折りたたみ方については、（残念ながら旧在籍社で）特許を取ったが、死蔵している。

「いつでもお泊りセット」も含めて、いつかは！と、“やまちゃん”夢を見ている。

（2005.8.25）

**関寛斎のことから**

“やまちゃん”「地図豆（GLOBE-BEANS）」という冊子を自費出版した。

そのとき、贈呈ものに次のような文を添えた。

「・・・この出版を含め、HP や各種講座への係わりは、これまでの間、地図測量のことで育てていただいた社会へ、少々の恩返しができればよいと考えてのものです。押し付けがましいことではありますが、このような意志を汲み取りいただき、ご笑覧いただければと思います」と。

これと前後して、ある書籍で関寛斎（1830-1912）のことを読んだ。

彼は、長崎での修行を経て医師となり、幕府軍医、阿波徳島藩の筆頭医官にもなったが、戊辰戦争のちは開業医となっていた。

そして明治 35 年、73 歳にして徳島の屋敷をたたみ北海道に渡った。道内でも特に厳寒の地である陸別に居を構えた寛斎は、荒野の開拓に精を出した。彼にとっての開拓は、「自然に帰ることと、社会への報謝」であった。

同志には、その拓いた土地を、惜しむことなく分け与えたのだという。そして、儲けるための農業を否定したという。

“やまちゃん”、この冊子を売って儲けようとは思っても見ないが、それでも何がしかのものが回収できれば、次の出版も可能になるのだがと、心の底では思っても見る。「少々の恩返しが・・・」といいながら、「無償でお分けす

るにしても送料の負担が・・・」などと考える。
心の卑しさを恥じる。
　到底、寛斎の域には達し得ない。(2005.9)

**「老人力」が手に入らない**

「老人力」から始まったのだろうか、「就職力」「仕事力」「地図力」といった使い方が、増えている。

「老人力」は、努力して得るというよりは、素直に老いることで自然に備わるというもの、加齢することで得られる能力？といったもので、その後の「〇〇力」という使い方とは明らかに異なるものである。

最近では、あまりにも自分を殺して努力して「力」を得ようとするあまり、心の病に罹るものも多い。

努力して得られるものには、限りがある。常人が持っているものは同量である。何かが足りなければ、何かが満ちているはずである。といって“やまちゃん”は生きてきた。

ところで、いよいよ老人力を手にすることが可能になった“やまちゃん”、収入の道は自ら絶って、悠々自適の生活を送っている。

夜明けから寝入るまで時間は十分あるはずなのだが、それが足りない。やりたいことが多すぎるのだ。

コラムでも紹介してきたように、講座や講演など自分ができることで社会へ少々の恩返しがしたい。ゆっくり歩ける道の地図や超小型の駅周辺マップといったものを作りたい。豆辞典シリーズ10編を完成させたい。HPで「やさしい地図の歴史」を取り上げたい。「孤高の祖父から始まる血脈の歴史」をまとめたい。「地図測量史跡」と「地図測量の200人」を再編成したい。これまで関連誌に発表してき

たものを整理したい。
　かといって、地図測量技術からも離れたくないので、少々の奉仕的なこともしている。
　そして、もっと素直にエッセイを書きたいと、カルチュア教室にも通っている。
　あー、“やまちゃん”リタイアしたものの加齢への抵抗力が強くて、未だ「老人力」を手にしていない。(2005.9)

## 頭の中を「地図」だらけにして

大型台風も去って、庭のコスモスもちらほらと咲いて、秋が近づいてきた。

この時期には、小学校では地図に関する授業があるのだろうか。あるいは、めいめいにネットサーフィンをする授業があるのだろうか。

この月の私のＨＰへのアクセスは、普段の月の約3倍、10,000以上にもなる。その解析結果を見ると、中には通算100回以上の訪問者もいるが、90%は始めての訪問者である。

となると「続けて見てみたいと思わない」「内容が面白くない」ページであるともいえるし、主客が子どもだからやむを得ないともいえる。

子どもが多いことは、Kids関連から「伊能忠敬」をキーにする閲覧者が多数を占め、時間帯としては昼休みを除く日中にアクセスが多いことからわかる。

管理が大変なので掲示板を置いていないので、閲覧者からの直接の反応はわからないが、それなりに維持管理に力を割いてきた管理者としては、多少うれしい時期である。

それにしても、閲覧者の目や手を引き止めておくには、目新しいことを月に1回程度は実行しなければならない。おかげで頭の中は「地図」だらけである。(2005.9.26)

**「地図力試験受験講座」**

この春に「地図力試験」をテーマに講座を開講したいので、その講師を引き受けてもらえませんかという話が、カルチュアセンターから舞い込んできた。

“やまちゃん”いつもの調子で深く考えもせず話を受けてしまった。その器ではないことは明らかであるし、地図センターの「地図力試験」の内容もかなりのもので、自身が受験しても博士になれる自信は無いのだが、引き受けたからには、努力しなければならない。

開講時期も次第にせまり、付け刃のように勉強を始め、講座資料を作り始めたのだが、これが思わぬことで手間取ってしまった。地図の大きさということでの壁に当たったのである。この定型化していない資料を相手に、それも過去から現在までのものを含めて多種用意して説明するとなると、並大抵のことでない。書籍で代行するにしても、多色の地図を紹介したものは紙質が良く、重さがある。

“やまちゃん”は、脚に弱点があり特に重いものを持つことを普段から避けている。また、それ以前に地図を積極的に収集する性癖がないこともあり、資料が不足する。そこで、自著である「地図豆」とパワーポイントを主にして地図雑学主体で対応することに方向転換した。

ところが講座名は、生徒集めのこともあって、話題の「地図力試験受験講座」で変更できない。これで「地図力試験」に受かるの？と受講生に問われたら、平謝りするしかない。

(2005.9.26)

## 地図は「今」を記録する

9月25日付け朝日に「土壌汚染と情報開示に伴って、過去の住宅地図に人気」とい記事があった。

03年の土壌汚染対策法の施行が根底にあるものの、人気に拍車をかけたのが大阪アメニティパークの土壌汚染問題である。それは、三菱地所などが旧三菱金属の精錬所跡地を再開発したのだが、同敷地の地下水から国の環境基準を超える砒素などが検出された。ところが、この汚染について三菱地所は十分な情報開示せずに分譲したというもの。

このことから、情報開示意識と事前調査の必要性が高まったというわけ。そこで、不動産取引に関連して、過去の住宅地図に人気が集中しているとか。

その理由は、どこに、何が、どのように存在していたかという基本的な情報が、官側にしっかりと整理・蓄積されていないことによる。

過去の地図からは、どこに、なんという工場が存在したかが、一目瞭然である。しかも、住宅地図であれば、写真現像所がクリーニング店がといった小さな汚染源さえも特定できる。思わぬことで、過去の地図が有効に使われることになったが、それは、ある意味で当然の結果ともいえる。地図はそれぞれの「今」を記録するものだから。

ところが注意すべきことが、一つだけある。過去を記録したものには、国土地理院の旧版地図での差別地名、民間の旧住宅地図におけ

る同様な地名と個人情報というものが含まれているから、意外な問題を引き起こす恐れもある。従って、良識ある組織の方々は、一定の管理下でこれを利用しなければならないというのが、悲観論者である“やまちゃん”からの忠告である。(2005.9.26)

## 許せる地図表現

イランの大統領が、「『イスラエル』は地図から消し去るべきだ」と発言したというニュースがあり（2005/10/29）、少々物議をかもしている。政治的なことで発言する資格など私にはないが、地図ことでなら許してもらえるかも？

地図は、「地球上の情報をある一定の決まりのもと縮尺化して紙などに表現したもの」である限りにおいて、地球上に存在するものを故意に削除することは許されない。そういってしまうと、「そうか、そうだよね」と妙に納得してしまうのだけれど、そう簡単なものでもない。

事実、領土や国ということでは、利害関係にある者の主張は異なるものであるから、それぞれが作る地図にも食い違いが出るのは当然である。身近なところでは、竹島や尖閣列島がその例である。

「そうはいっても、国連にも加盟している国を地図から削除するのは、いかにも暴挙だろう」という声もきこえそうだが、地図の世界ではそう簡単なものでもない。かつてのユーゴスラビア紛争の最中では、それぞれの主張に沿って地図から国が消し去られ、書き換えられたはずである。それ以前、太平洋戦争時の大東亜共栄圏といったものもそれに近い。それに比べれば、同戦時下に新宿の淀橋浄水場が公園風に書き換えられたことなどは、お笑い沙汰といったものである。

ところが、地図を作る側からすれば、前者は（それぞれの主張の下で）正しく表現したものであって許されること、後者は故意に誤表現し

たもの許されないことにならないだろうか。

設計幅員７ｍの道路が、ある地図では１車線の記号道路で、他の地図では２車線で表現されることは許されること。未開通の高速道路が地図に表記されるのは許されないことである。

いずれにしても、地図表記のことやそのことの発言で紛争が激化するのは避けたいものだ。

（2005.10.29）

**フジモリ氏に手をかすのは誰？**

11/8 朝日によれば、ペルーとチリは海の中の国境、領海について紛争しているという。

ペルーは陸の国境線の延長を領海境として主張し、チリは赤道と平行な線を両国の境として主張しているのだとか。同様な問題は、以下アドレスにあるように日本にも多く存在するが解決策は無い。

http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/otona/chizumame/chizuma-37.htm

① 陸の境をそのまま直線状に延長する
② 河川中心線にあるとき、そのまま延長する
③ 河川中心線にあるとき、海の中の川（澪）の中心線とする
④ 海岸線に直角な方向とする
⑤ もちろん、赤道と平行な線をということも

それにしても、紛争の機会を捉えてチリ入りしたフジモリ氏の行動は、可と出るか不可と出るか地図・地理に興味のある野次馬には楽しみでもある。

日本の領土・国境のことでは、北朝鮮不審船、中国潜水艦の領海侵犯、そして昨今のガス油田を巡る日中の軋轢など領土、領海を巡る問題が注目を集めているように、国境が広義の領土の境を示すものだとすれば、日本のそれは陸にではなく海にある。

この問題は、林子平の「三国通覧図説」の誤った記述に始まる国境論争や、咸臨丸による小

笠原諸島測量が同島を日本固有の領土として認めさせる重要な手がかりになったこと。最近では、沖ノ鳥島を日本国土とすることで、我々は約 40 万平方キロメータの排他的経済水域を手に入れているのだが、国際世論に対抗し、これを今後も維持するためには、年間 2 億円もの経費を費やしている。さらに、何らかの経済活動を諸外国に認めされるため、地図を作り電子基準点を設置してきた。涙ぐましい努力に手を貸しているのは地図測量技術者である。フジモリ氏に手をかすのは誰？

**記憶を地図化、地図を記憶化**

小倉百人一首のかるた競技では、上の句の読みを聞いて、下の句の札を取る。歌が書かれた下の句の札は、競技者それぞれの前に五十枚ずつ配置される。競技者は、この札と上の句とを関連づけてわずかな時間で配置を記憶することになる。

そのとき、小倉百人一首のクイーンと呼ばれる人は、上の句の出だし（子音）と札の配置を瞬間的に地図化するのだという。この間の脳の動きを調べると「普通の人は記憶するときには使わない、視覚イメージを作る場所や言語をつかさどる場所が活動している」のだとか。(1/8 朝日)

この覚え方は後天的なものだというから、訓練しだいで誰にでもできる。とはいっても、誰しも名人になれるというものでもない。

それでも、人には「訓練や学習ということで到達できることは数多くある」と思う。また、「記憶を地図化」のことから“やまちゃん”にも対抗できそうなことを思い出した。

“やまちゃん”自称「日本で一番航空写真を見た人」だと思っている。昭和四十九年(一九七四)からしばらくの間、日本で最初の、いや世界で最初かも知れない、国土全域のカラー航空（空中）写真撮影が行われて、そのときの写真の検査を主体的に担当した。四十万枚の近くのうちどのくらい見ただろうか。

それ以前にも地図を眺めることは多くあったが、その撮影計画のために日本全国の地図も隅々まで網羅的に見た。こうした積み重ね

で、ジグソーパズルのように日本各地の地図や写真の断片からそこが日本のどこかであるかを知ることができる「力」を持っている。

詳細手順をここで言うことは難しいが、写真を手にしたとき、直ぐにすることは陰影などから方位を決める、道路や鉄道を見る、町の形を見る、それらの位置関係などから総合的に判断する。ただし、集落などがない時には地形や水系、そして植生といったもので総合的に判断する。それ以前、海岸線があるときはかなり容易である。

記憶を地図化する力はないが、多くの地図を記憶化していると思っている。(2006/1)

**「太田光の私が総理大臣になったら」にのせられて**

毎日が日曜日の身分であるが、一応の正月休みに標題のテレビ番組を見た。そして、地図測量のニュース「ＧＩＳ　うえぶまがじん」といったものを配信するブログの骨休みに、そのときの感想といったものを冷やかし半分に書いた。

書いた内容は、それこそどうでもいいことなのだが。地図や測量それも少々のコラムつきとはいえ専門的なニュースとは桁違いに多くの反響があった。そこで、調子に乗って続編を書いた。そうこうしていると、週一の番組として登場した。

いっぱしの「太田光の私が総理大臣になったら」批評家としては、無視することは職を放棄することにつながるから、再度書き込むことにした。

ブログに主旨もへったくれも無いのだろうが、当人が主に伝えたいと思っていた「ＧＩＳうえぶまがじん」の愛読者は、日に数百人で平日の訪問が多いのだが、同批評へのアクセスは休日に集中し、掲載時には日に千人を超すアクセスがある。そして、過去に遡って同批評へのアクセスログが倍増したのだ。

不本意なものに乗っ取られた気持ちにさえなったものの、そのことで、爺さまの心も、何がしら高揚するから不思議である。

そうこうしているうちに、番組では、議員に対してボードにイラクの位置を示す地理の問

題が出た。ディレクターだろうか、太田だろうか、ともかく製作者側の思う壺にはまった国会議員がいたからお笑いである。イラク問題も含めて真面目な顔をして議論をし、報道番組などにＴＶ出演している山本一太君や甘利明君という自民党議員がイラクのあるべき位置も分かってはいないということ。それも、カンニングをして二人ともヨルダンを示したことは痛快であった。

これではペルシャ湾やホルムズ海峡を取り巻く地政学的な問題などということは議論できない。ごく普通の国会議員に、そんな真面目なことを要求する方が馬鹿か。

ともかく、地図に周りにいる“やまちゃん”としては地理教育の不足を嘆く以前の問題が、教育基本法以前の問題が、国会議員の資質にあることが、お笑い番組で指摘されたことが何よりも嬉しかった。

以下はブログのありか。

http://kaempfer.at.webry.info/200601/article_3.html
http://kaempfer.at.webry.info/200601/article_7.html
http://kaempfer.at.webry.info/200604/article_8.html
http://kaempfer.at.webry.info/200604/article_14.html

（2006.4.25）

## 再び、「領土と地図・測量」のことで

竹島（独島）とそれに係る排他的経済水域のことで、日韓関係がギクシャクしている。

また、これに関連して地図（地名）や測量のことが、新聞などを賑わしている。以前に私たち地図・測量の仕事とこれら紛争のことについて、「少々大げさに言えば、地図・測量技術者は『領土』という意識無しに地図を作成し、測量を成すことはできない」という言葉で表現してみた。

今回のことは、まさにその模範例といったものであり、好ましいことではない。さらに国内の過去のことでは、砂川基地闘争や成田空港建設などでも事業着手の証しとして、測量の実施が象徴的に行われたことがある。測量者が紛争の当事者やそのきっかけになることは逃れたいことだが、このことも測量者には避けては通れないことでもある。

となると、前回の警句まがいのことは、「少々大げさに言えば」という前置きが取れて、以下のようになるのか見知れない。

「地図・測量技術者は『領土』や『紛争』という意識無しに地図を作成し、測量を成すことはできない」

さて、日韓のことだが、何とか平和的手段で解決したいものだ。

簡単な問題でないことは分かっていることであり、浅知恵で解決できることでないことも明々である。それでも、仮に地名のことだけなら領土問題とは別に解決することはできないのだろうか。

　どのような海山や海谷があるのか知らないが、例えば両国民にとって共通かつ象徴的な名称の利用など、混乱しない命名を検討するのもよい方法だろうとも思った。
　さてと、頭を巡らしてみたが、海を隔てた近くて遠い国だからだろうか、正常対等な文化交流が育たなかったからだろうか、そのような人名や語彙といったものが浮かばない。残念なことである。(2006.4.25)

## 地図と測量が北朝鮮を開放する日

中国東北部開発を進めたい中国は、日本海に近いこの付近に港を持たないことから、他の国々との思惑の一致もあって、中国・北朝鮮・ロシア国境地帯の図們江河口付近での開発を進めているという。

そこでの開発当初、必要な地図の不足から、旧日本が作成した地図が重宝されたのだという。

それは、たぶん「外邦図」と呼ばれるものであろう。

同図は、太平洋戦争時、東南アジアなどではそれぞれの国が所有していた地図、それも主に植民地化していた西欧諸国が作成したものを入手・参考にして日本が再編集したものであった。

中国などでは、秘密裡に日本陸地測量部が現地で作成したものも含まれていた。

太平洋戦争後のことでは、アメリカも日本に進駐すると早々に空中写真撮影を行い、これを使用した写真測量による地図作成を実施した。この成果は、戦後復興に一定の役割を果たした。このように、地図・測量は、経済開発の基礎資料として必須のものである。

その後日本政府は、ＪＩＣＡを通じて発展途上国での地図作成協力を実施している。その成果は、1970 年からこれまでに日本国土面積の 2 倍程度地図作成と、同 4 倍以上の空中写真撮影を実施してきた。

日本が、前記の図們江河口地域で経済援助するという計画は聞こえていないが、他の発展途

上国と同様に地図・測量のことで援助できる日が来て、東アジアの平和の始まりとなることが夢のまたゆめ。（2006/6/1）

## 少しだけ痛みの分かる自分がうれしい

趣味の集まりで訪れた藤沢市で手に入れた、「ふるさとまっぷ　善行地区」という散策パンフレットには、遺跡や神社などとともに測量標石が紹介されている。

一等三角点などを散策コースで紹介している例さえもあまり聞いたことはないのだが、ここでは明治期に内務省が「外国人遊歩規程測量」といったもので使われた測量標石が取り上げられている。

この石のことは、このホームページでも紹介しているから省略するが、地図・測量を仕事とするものとしては、石のいわれを聞いて散策する一般者がいるという、この少々のことが嬉しい。

ところで、歳を取れば仲良くしている病気の一つやふたつはあるもので、私は 1989 年から変形性股関節症を友人としている。最悪のときは、人工股関節を使う手術をするのだが、今のところは持ちこたえている。

ところが、前段にあった趣味の集まりに参加してからというもの、そのお友達の機嫌が悪くなって、今は股関節とともに膝が痛く、歩くのも少々億劫である。特に階段がいけないから、お出かけは自粛して静かにしている。

さらに私ごとだが、次男の子は早産で九百五十グラムで生まれたことで、運動機能に障害がある。二歳半になるころに、やっと立ち上がることができて、今は何とか歩くことができるようになったが、左手足にはこわばりのようなものがあって、人並みの動きはできない。

しかし、これら二つのことが私に幸せを運んできている。

それが目に見えて何かに効果を上げているということでもないが、体の不自由な方の気持ちが少しだけ分かるようになったということ。

自動車には優しくても人にはつらい階段や段差の多い町、シルバーシートを占領する若者、休憩場所の無いショッピングセンター、放置自転車や置かれた荷物などで安心して歩けない歩道、弱者の目で気づくことは多い。

人ナビは、これを解消してくれるルートを探してくれるようだが、弱者のためには街の作りを変えることである。

体が不自由になったという幸運を受けても、今はどのような行動も無いが、地図・測量のことに限らず、少々の発言などから役立つことがあればと思っている。(2006/6/6)

**こんな記事が単に嬉しい**

2006年7月4日朝日夕刊には、地図雑学をする私にとって興味深い記事の掲載があった。

その一つは、「アリの体に歩数計アリ」というもの。

えさを求めてあちこち勝手に歩き回っているようなアリ。彼らは、方向の認知には太陽光を利用し、距離の把握には歩数計、すなわち歩測を利用しているのだとか。

これを実証するためにアリの脚に簡単な手術を施して長さを変えたところ、記憶された目的地を越えてしまうなど、簡単に目的地に到達しないが、一旦その脚で学習してしまうと、誤り無く目的地に到達するのだとか。

う一ん、動物も基本は歩測かと、測量者は納得する。

さらにもう一つは、「自転車便頭の中を疾走」という記事。これは、バイク便ならぬ自転車便会社での配車係氏の頭の中のお話。

配車係りは、荷の受け取り先と届け先住所を確認すると、自転車で走り回る配送係りの現在位置を確認して、無線などで効率的なルートを指示するのが役割である。

ところが、配車係りは指示に際して紙の地図もモニターも見ない。配送係りと無線交信しながら脳の中に地図を広げ、これを展開していくのだとか。

これにも妙に納得。私も地図を見ないことが多い。歩きなれたところの延長なら、脳内地図を広げ、新しい情報をこれに書き足していく。新しい土地へ、旅行などに出かけると

きは、事前には十分読んでいくが、現場では最小限にしか開かないことが多い。

　そう、自転車と地図ということでは、2004年10月30日朝日の「地上絵　ぼくの『東京ナス化計画』」という記事を思い出す。ナスカの地上絵ならぬ、東京を自転車で巡っては地上絵を描いてしまおうというものである。

　そこには、地図や空中写真を使用した周到な計画が必要であり、軌跡を残すためのGPSや脳内地図も必要になる。(2006/7)

　背に子ども、前かごに地図を入れてママチャリで颯爽と？走る見ず知らずの石川さんの写真を思い出しては、地図・測量を究極の遊びにした彼に、いつまでもエールを送っている。(2006/7/5)

**店主は、こんなことが恥ずかしい**

勤めを辞してから少し経って、少々の文を書いた。

そのとき、編集者に「山岡さん、肩書きどうしましょうか」と問われて躊躇した。

「肩書きね、そんなもの必要なの」

「そりゃー、何も無いというのは、読者に不親切だからね。地図研究家とか、地図測量史研究家とかどうです」

私としては、「そんなもの、どうにでもしておいてよ」といいたいところだったが、そのままにしておくと、それこそ本意でない「研究家や、元〇〇」といったことになりかねない。そこで、肩書きを考えることにした。

それ以前、同じ会社を辞めた先輩が、経営コンサルタントといったことを主に仕事をするのだといって、有限会社〇〇商店店主という珍しい肩書きの名刺を持って挨拶に来た。私の質問に、「この肩書きなら間口が広く、何をやっても良いから」と説明していた。

何らかの意思を持った仕事をするために勤めを辞めたわけではない。

人に言われてすることはしない。

好きなことだけ、思いついたことするためと決めて辞めたのだから、この先輩の説明に飛びつき、アイデアをそのまま借りることにした。

肩書きを「オフィス　地図豆店主」とした。そして、言い訳も考えた。

「『地図』は、文字どおり『map』のこと。それは、これまで永く仕事としてきたことであり、

今後も係わりをもち続けるものとして自覚していること。『豆』、それは『小さな』といった程度のこと。そして、通常は一つでは役立たないもの、たくさんの『豆』が集合して意味を持ち役立つもの。わずかな仕事も、小さな『豆』といったものであるから、やがて集合して『豆』として役立つことがあるだろう。また、輝くような一粒の『豆』ができれば、それは種となって、どこかに蒔かれるだろう」と。

どのことも、他人から見れば石ころばかりだが、私にとっては優秀な種にはなれなくても、どれも「豆」くらいにはなっているのではないかという気持ちで仕事をしている。

これだけ理屈を言っても、まだ欲というものが取れていない。

そこには、

報酬を得るための仕事を準備している自分がいる。

報酬に不満を言っている自分がいる。

報酬はいらないから、ボランティアでよいから、役立つ何かをしたいと思ってはいるが、そうかといって積極的にやろうとしない自分がいる。

仕事があるからと、家事を断っている自分がいる。

仕事だからと東京へ、地方へと一人で向かう自分がいる。

店主は、こんなことが恥ずかしい。

（2006/9）

**五度ずれている日本地図を！**

「千年、働いてきました」（野村進著　角川 one テーマ 21）を読んだ。

ニッポンは老舗大国だという。創業 100 年の会社が1万5千社もあるというから、おどろく。老舗製造業には共通項があり、それは、①血族に固執せず、しなやかに対応し、②核となるものは守り続け、③分をわきまえて町人の正義を守ることだという。

社会から不要と思われた組織は、いつか淘汰されるはずである。しかし、いずれの老舗も、現在ではケータイや自動車など先端商品に部品提供するなど時代の変化にみごとに対応し、存在価値のある組織になっている。感心するばかりだ。

地図にかかわりを持つ私には、書籍の中にあった、ある経営者の言葉「日本地図を五度ずらすと、経済地図になるんですよ」が気になった。意味するところは単純であって、視点を変えると見えるものがあるといった程度のことだが、地図測量をするものも、五度といわず少しずらして考えてみてはどうだろうか。

新しい事業が見えてくるのではないだろうか。

そして妻の元に「通販生活」が届いた。ここで、糸井重里氏が地図帳について書いている。

表題は、「ほめちぎります。いい案内人が隠れている『日本地図帳』」というもの。

お題のとおり、某社発行の日本地図帳のおもしろさ、素晴らしさを語っている。糸井氏に、「これを作った人は、人が地図を見るとき分か

りたいこと、知りたいことが何なのか、『その気持ち』を分かっている人が、この編集室にはいるのだなと想像するのです」と言わせている。

糸井氏は、単に地図マニアかもしれないから話半分に聞くべきかもしれないが、このように言わせる商品やシステムを提供したいものだ。

この日本地図帳に、今すぐ会いたくなるほどである。そして、通常のものと比べて何が五度ずれているのか確認しなければならない。

（「ブログ地図豆」から転載加筆）

**今のうちに　忘れぬうちに　故郷の村の地図を書いて置かんと思い立ちたる**

昨年の夏ごろから、家系史といったものに取り組んできた。

同じ血を受けたものが、家族のルーツについて少しでも知ってもらいたいと思う、年寄りのありきたりの願望である。

家系史をしばらく書き込んでいるうちに、数えで 99 歳になった母が、正月明けに入院した。最後まで気丈な母は、入院早々医師にこういった「延命治療はしないでくださいね！」と。

そのことで、私たちは躊躇なくその方向の治療方針を選んだ。しかし、振り返ってみれば、直前までひとり暮らしを通し、健康で、100 歳にしては明晰といえるほどの頭脳を維持した

彼女に、私たちは適切な治療を施し、悔いのない最後の日々を与えたのだろうかと反省するところもある。
「もう、99歳だから」「死は直前だから」を前提に考えてこなかっただろうか。
　反省している！
　難しいことだが、自らの死の迎え方についてしっかりした考えを持つ、そして身内に伝えておくことが必要だと今は思っている。
　悔いのない人生の終末を送るために。
　家系史を急いでまとめた。不十分ではあるが、これを製本し兄弟らに送った。彼女とその祖先を偲びながら見送ることができればよいと考えて。
　各人が読み終えたのは、死後のことであったろう。
　そして今私は、「今のうちに　忘れぬうちに故郷の村の地図を書いて置かんと思い立ちたる（石川啄木）」の心境で、少々のものを書き始めた。

**地図測量者が見たレオナルド・ダ・ヴインチ展**

先日、東京国立博物館で開催されている「レオナルド・ダ・ヴインチ　天才の実像」を訪ねた。それ以前、六本木ヒルズで「レオナルド・ダ・ヴインチの手稿」も見ている。かといって、レオナルド・ダ・ヴインチに従来から興味を持っていたというものでもない。

今回の展示を見るきっかけになったのは、ＮＨＫＴＶの「レオナルド・ダ・ヴィンチ　受胎告知（2007 年 5 月 10 日放送）」を視聴したことにある。絵画や美術というものに何の特筆すべきものももたない私が語るのは恐れ多いのだが、彼の数少ない完成作品の中の一つである「受胎告知」には、レオナルド・ダ・ヴィンチの卓越した技量が凝縮されているようだ。中でも、この絵の掲げようとされた位置とそのときの鑑賞者の視点を意識した独特の表現についての説明に、私の興味は向けられた。

そして、地図測量者は展示を見た。

もちろん、そのような意味合いを持って「受胎告知」も見たが、地図測量者の興味は異なるところに向かった。

彼はこの初期の作品ののち、より美しい表現を目指すために植物や動物、そして人体などの自然科学や博物学的なことへ興味を移していったようだ。たとえば、（空気）遠近法の延長から山岳スケッチや鳥瞰図へ、自然地形などの表現の先には水による地表面の侵食・洪水・河川浸食があって、河川景観図、河川の蛇行地図そして河川堤防計画図へ、樹木や人体の表現の

ことから血管や河川における流量とその分岐について、それぞれ興味を広げる。

視点の先にある身近な自然や地図を見るにつけ思ったことは、地球を紙などに表現してきた私たちは、彼のような視点で地図を作成し提供しているだろうか、私たち作成者だけが分る造形美を提供してこなかっただろうかという疑問である。（「ブログ地図豆」から転載）

**父母が咲かせた花**

「“やまちゃん”の母は健在である」という書き出しで、「地図と花とシーボルト」というコラムを書いたのは、2004 年 3 月のことだった。

地図・測量に関わりのあるケンペル、ツュンベルク、そしてシーボルトが花や種子とも近いところにいたことが、ただ嬉しかった。そこでも書いたことだが、ふるさとの我が家の庭には、父の咲かせる菊やダリアのような多年や宿根の草花類が多くあり、そして、後年には、花を愛でる母の姿が見えた。

その影響を受けて、私も花好きである。

今は、ＰＣや書の前にいるほかは、花の前にいる。めずらしい草花があるわけでもない、広

い庭があるわけでもないが、今年の庭の草花は特に美しい。

北の街で一人暮らしをしていた母は、99 歳の春 3 月に、すでに逝っている父のもとに行ってしまった。

きっと二人が、この庭の花を立派に咲かせてくれたのだと思うことにした。

そして四十九日の朝、孫が生まれた。小さな彼女は故あって、まだ保育器の中にいる。天上の二人が、か弱い花が丈夫に育つことを見守ってくれていることを願っている。